

雨の日も、
風の日も、
晴れの日も、
共にある。

05

* News Letter *

結晶母

Terra Renaissance

教育がひらく、子ども達の未来

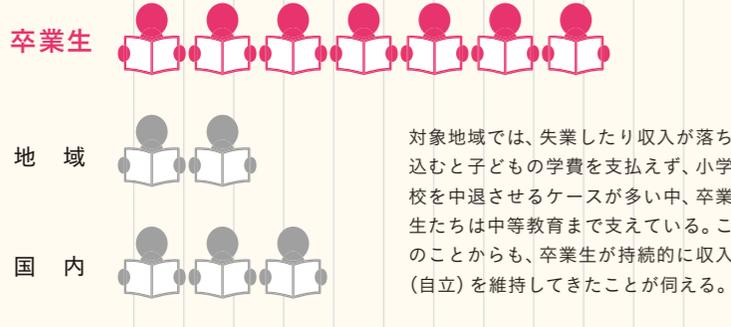


元少女兵と当会スタッフのトシャ(写真中央)。卒業後に子どもを2人出産、さらに他者の子どもを2人養育し、また両親も呼び寄せともに生活している。支援開始時には4歳だった子どもを、高校まで進学させることができた。

貯蓄額の変化



中等教育の就学率



社会復帰を果たした、元子ども兵の「その後」。

2005年から開始したウガンダにおける「元子ども兵社会復帰支援プロジェクト」。日本の皆さまからのご支援によって、これまでに190名が社会復帰を果たしました。私たちは、支援の長期的な有効性を確認することを目的に、2009年までに訓練を修了した75名中68名の元子ども兵たちを対象に、「支援のその後」を調査しました。

調査の結果から、収入をはじめとする様々な変化が明らかになりました。まず、世帯収入では地域住民と比べて1.9倍も高くなっており、また貯蓄については、訓練卒業時の2.6倍に向上しました。

収入の変化は、養育や教育という面にも影響が出ています。自分の子どもに加えて、孤児など他者の子ども(平均1.3人)を育てていることがわかったのです。その理由を聞くと「私も里親に育ててもらったから」という回答がありました。さらに特徴的だったことは、教育に多くのお金をかけていることです。初等教育への就学率は同地域の78%を上回る94%と、とても高く、また中等教育への就学率は、地域住民に比べて3.6倍も高かったのです。

教育にお金をかける理由を聞いてみると「自分が失った教育の機会を子どもたちに与えたい」という回答がありました。また、中等教育の機会を与える理由として印象的だったのは、「知識と技術を得ることで、人生が変わることを知ったから」という回答でした。

「子どもを学校に通わせ、それを続けることができた」

これらのことは、自尊心の変化にも影響を与えています。支援を卒業した元子ども兵の多くが、現在の自分自身に対して自信を持ったり、誇りを感じられるようになったことがわかりました。その理由を聞くと「どんなに苦しい時でも、子どもに衣食住を与え続けることができたから」「子どもを学校に通わせ、それを続けてきたから」「地域の貧しい人を支援することができから」などと答えてくれました。

今回の調査から、支援を受ける側の人々が、どんなに大きな傷や困難を抱えていても、それぞれに内在しているチカラや「できること」に目を向けながら支えていくことの大切さを、あらためて感じました。これからは「ひとり一人に未来をつくる力がある」と信じて、活動を続けていきたいと思います。

「他の人を助けることで 自分の価値があがる」

JICA草の根パートナー事業では家畜飼育などの生計向上支援を行っています。サヴィさんは、その対象者のひとりです。

2000年のある日、サヴィさんは自分の土地を耕していた際に地雷の被害に遭い、右足の膝から下を失ってしまいました。

サヴィさんは困難に屈せず懸命に働き、換金作物（キャッサバ）の栽培によって収入を得られるようになりました。しかし、そうした状況は2016年ごろから一変します。換金作物の値段が下落したことで借金が膨み、最後には、土地や家を手放し困窮した生活に陥ってしまったのです。

支援の開始から3年目を迎えた現在、サヴィさんはヤギやアヒルの飼育に加え、鶏の飼育訓練にも積極的に参加。食べ物を自給できるようになったことで支出は減り、さらに多様な収入

源を確保したことで、生計を向上させています。

「自分の価値をあげるために生きているんだ。自分だけ良ければいいわけではなく、他の人を助けることによって、自分の価値があがる。」と、サヴィさんは言います。

地雷被害や借金などの問題を乗り越え、また周囲の人たちを助けてきたサヴィさん。私は、そのバイタリティにとっても感心しました。その他の支援対象者のモデルになってほしいと思っています。



新たな家畜飼育のため、スタッフから鶏を受け取るサヴィさん(写真:左)

『平等感』の発揮が、 自立と自治を促進する

ブルンジでは、シングルマザーなどを対象にヘアドレッシングなどの職業訓練を通じた自立支援を行っています。1年目には技術訓練を修了し、2年目の今年、店舗の開業支援を開始しました。

店舗の運営には髪を切るだけでなく、髪編み込みや、売り上げの管理など、様々な役割が必要です。このため、1店舗あたり5、6人のグループで運営しています。開業以降、徐々に客足も増え、平均して月に約二十万（一人当たり）の収入を得られるよう



になりました。さらに、グループ運営を採用したことで、子どもの病気など、急な出費を必要とする人がいる場合、店舗の売上を支給できる共済のような仕組みを整えることができました。

一方で、当然ながら順調なことばかりではなく、従業員同士の仲違いなどを理由に閉鎖状態になった店舗もあります。そんなとき、私が意識しているのは『平等感』です。何か問題が起きたとき、誰かに肩入れをしたり、私たちが解決策を提案することはありません。判断を任せることで、彼女たちの自立と自治を促進できると考えるためです。

とはいえ、私自身それについて不安がないわけではありません。そのため、日頃から現地スタッフや村人との信頼関係を築くことはとても大切です。困難な道のりではありますが変化への喜びに気づきながら、支援を続けていきます。



技術訓練を修了した元ストリートチルドレンが、開業したヘアサロンでお客様の髪を切る様子。

テラルネなひとびと



スタッフ編

米田 瑞希 Mizuki Yoneda

啓発事業部 法人連携支援担当



こんにちは!啓発事業部の米田瑞希です。今年の9月に入職し、主に法人連携支援を担当しています。

大阪に住んでいて、通勤に往復3時間かかるのですが、読書が好きな私にとっては、ゆっくり本を読める大切な時間。最近は、友人と「通勤読書会」を発足し、通勤中に読んだ本をSNSで紹介しあっています。『一人ひとりが無数のピースとなって役割を果たし、この世界を完成させ、それは見えない世界にもつながっている。あなたも私も、たった一つのピースだ』これは、私が好きな本の中の一節です。

テラルネで働く中で、様々なスタッフや支援者の皆様



との出会いをいただきます。書ききれないくらいその背景は多様ですが、それぞれが平和のために「今自分にできること」を実践している。そんな姿を見たとき、いつも先の一節が心に浮かびます。一人ひとりが平和のピースなんだと。たくさんのピースに出会えるここでの仕事に感謝しながら、自分自身のピースの形も見つけていけたらと思っています。

ファンクラブ編

長谷川 広一さん

国際協力団体勤務



支援のきっかけは小川さんや栗田さんの講演を聞いたことです。スマートフォンなどに利用されるレアメタルが子ども兵など紛争の原因になっていることを知り、とても心を動かされました。私は、以前フィリピンに住んでいたことがあるのですが、現地では急速にスマートフォンが普及していました。私たちの無意識の消費行動が、紛争を生み出しているかもしれないと思うと、これは他人事じゃない、自分も何かできることをしたいと思いました。

ファンクラブ会員、募集中!

1口1,000円(毎月)から、活動を応援できる「ファンクラブ会員」。情報満載の活動レポートや、海外からのポストカードなどをお届けしています。お申し込みはホームページ、またはお電話でも受付中。すでにファンクラブ会員の場合は金額変更も可能です。お気軽にお問い合わせください。

テラルネッサンス ファンクラブ

検索

電話 075-741-8786 (月-金 10時半-18時)

文・岡本美穂

2015-2018年の期間、テラルネッサンスのインターンとして活動。京都大学を卒業後、青年海外協力隊としてポツワナで国際支援に携わる。

平和をめぐる冒険

- インターンシップ卒業生によるエッセイ -

初めてテラルネッサンスのことを知ったのは19歳のとき。大好きな女優、石原さとみさんの訪れた場所が、私の憧れの地アフリカだった。彼女の経験を通して知った「子ども兵」の存在。そして、彼女彼女らの内なる可能性を信じ、その未来をサポートし続ける日本のNGO。当時、京都大学に通っていた私は、そのNGOの事務所が京都にあると知り、何かに強く引っ張られるようにインターンへ応募した。

いま振り返ると、大学生活のほとんどをテラルネッサンスとともに過ごしてきたように思う。ファンドレイジングの募金キャンペーンをはじめ、小型武器の政策提言活動やインターン合宿、ウガンダやカンボジア事務所への訪問など、ここには様々な挑戦をさせてくれる環境があった。

ときに思い悩むこともあり、国連WFPで働きたいという当初の思いが揺れ、自分が本当は何をしたいのかわからなくなることも、テラルネッサンスの「ひとり一人に未来をつくる力がある」という理念に疑いを持つこともあった。けれど、その度に話を聞いてくれる職員さんやインターンの先輩、同期、後輩たちがいて、それは私にとって、とても大切な存在だった。

インターン生活のなかでは、自分が関心を持つ分野へ取り組む機会が転がってくることもあったのだけど、それは今思うと、自分の悩みや思い、今後どうしたいのかを、言葉にして周囲と共有していたからだだったと思う。言葉が持つ力は強い。しかし、その力の源は周囲の人々の支えだったりする。

テラルネッサンスを通して関わった人たちは、いつも私を応援してくれていた。必ず実現したい夢や目標があるのであれば、恥ずかしがらず言葉にのせて届ける。そうすれば協力者が現れ、仲間ができる。そう思える今の自分があるのは、間違いなくここでの生活のお陰だったと胸を張って言える。

3年と2ヶ月働いたテラルネッサンスを卒業し、私はいま、青年海外協力隊として15歳の頃から夢見ていた国際支援の現場に立とうとしている。これまで、理事長の小川さんをはじめ、カンボジアの泰さん、ウガンダの鈴鹿さんという鏡を通してしか見ることもなかった支援の現場。これからは、自分の目で見て、自分の足で動き、自分の口で事実を探し、自分の頭で正しい判断しなければならぬ。

青年海外協力隊の派遣前、訓練最後の講座で所長が言っていた、「活動中は頑張らない、でも諦めないこと」という言葉。それを聞いて私の頭に浮かんだのは「諦めずに活動し続けます」という、テラルネッサンスの活動理念の一節にある言葉だった。同じ隊員の誰かも言っていた、「世界平和って実際難しいし、実現できるとも思っていないけど、諦めないことはできるから」と。

私はこれからも、平和な世界の実現を諦めない。人々の心の中に、平和な世界を願う力強い炎があることを疑わない。これからも、テラルネッサンスで育んだ平和の想いを胸に、出会う人々と手を取り合せて小さな一歩を着実に積み重ねていきたい。





世界の扉絵 .05

地雷で足を失っても、多額の借金を抱えても、どんな困難に直面しても、生きている限り人は何度でも立ち上がることができる。自分だけが良ければいいのではなく、他の人たちを助けていれば、生きることを怖がる必要はない。自分が困った時には、みんなが助けてくれる。



理事
アジア事業マネジャー
江角 泰

terra_ngo

インターンシップとして、テラルネで働きませんか？

テラ・ルネッサンスでは、大学生・社会人を対象に、京都事務局のインターンを募集しています。募集時期は不定期ですが、春先など年に2、3回募集を呼び掛けています。主な業務内容は、広報・ファンドレイジングをはじめ、講演やイベント出展などです。これまで100名以上の方がインターンを経験し、卒業後の進路は国際協力系をはじめ、大学院進学や一般企業への就職と様々です。インターンを経験して、将来への可能性を広げませんか？詳しくは、ホームページをご覧ください。



テラルネ インターン

検索

http://www.terra-r.jp/icando_internship.html



- 日常シリーズ・ウガンダ事務所の場合 -



見て歩くだけで
楽しい市場



生のお肉
切り落とします

ウガンダ北部の街、グル。首都に比べると経済格差があるものの、住むにはちょうどいい快適な環境です。

News Letter.05 結晶母

2019年12月3日発行

発行 © 認定NPO法人テラ・ルネッサンス

発行責任 © 小川 真吾

企画編集 © 小田 起世和

本書の一部または全てを複写・転載引用する際には、予めテラ・ルネッサンス事務局までご連絡ください。

© 2019 Terra Renaissance